



| | |
|--------------|---|
| Title | Communication-Design 2 表紙 |
| Author(s) | |
| Citation | Communication-Design. 2009, 2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/21268 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Communication-Design

異なる分野・文化・フィールド — 人と人のつながりをデザインする

経緯

プラスチックのようで、カーペットにも見え、思わず触れて見たくなる。どれもオレンジ色の長方形。手に取って感触を味わっていると、指先にひっきりかきを感じる——Communication-Design——。ひっくり返してみると、このオレンジが本のカバーであることに気づく。それを捲ると、どの頁に着地しても、別の頁に導こうとする何かに出会う。その促しが何であるのかは分らない。

本でありながらも触覚に訴え、身体のあるゆる感覚と結びつくことをねらった本書は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターでの“オレンジブック・プロジェクト”という実験を通して作られています。Communication-Designという本書のタイトルは、「コミュニケーションデザイン」という新たな概念を練り上げるための試みの場、既に取り組まれている「コミュニケーションデザイン」に関わる実践について考える場、を意味しています。つまり、あらかじめ理論や概念が作られ、その応用の実践としてプロジェクトが実行されるのではなく、取り組みのなかで定義が生み出され、それが更新され、思わぬ発想と方法論に出会う、そのような実験的な側面がこの言葉には埋め込まれています。

コミュニケーションデザイン・センター

本書を発行するコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）は、「専門的知識をもつ者ともたない者のあいだ、利害や立場の異なる人々のあいだをつなぐ、コミュニケーションの回路を構想・設計・実践すること」を目指して、2005年4月に誕生しました。既存の学術研究に携わる者に限らず、多彩なバックグラウンドを有する者たちが集まり、出自も考え方も異なるスタッフが協働を模索しています。そのことがすでにコミュニケーションデザインの実践となり、その模索と試行錯誤を方法にして、教育プログラムや学外での各種プロジェクトが生み出されていきます。

例えば、大阪大学全学を対象にした教育プログラムも、コミュニケーションデザインの実践・実験の場です。授業に参加する多分野の学生は、授業内容からばかりでなく、異分野の者やその発想に出会うことにおいてディスコミュニケーションを体験し、その場での対話を通してその困難の意味を探っています。そして、一人ひとりが自分のコミュニケーションのスタイルを組み替え、新たなプロジェクトを生み出していきます。同様にキャンパス外でも、様々なコミュニティとの協働実践の場が開かれています。本書もまた、こうした実践の方法論と意味を探る試みの場となっています。

本書について

本書は、CSCDの活動を紹介する「第1部 特集」と「第2部 コミュニケーションデザイン論集」の2部から構成されています。バックグラウンドの違いは、習慣や文化の違いでもあり、言葉や表現の違いも含み持っています。とりわけ「論集」では、文章と書くという表現形態がとられていますが、これも私たちの実践をある分野の表現方法に、あるいはある習慣に押し込めることになっているかもしれない。それでもなお制作を続けてきたのは、制作の内に生まれ出るものに期待するからです。

こうして『Communication-Design』は、3冊目を向かえました。1冊目は、2006年に「0号」として、学内外の関係者の手元に届けられました。特集では、各スタッフの紹介とともに、「私たちはどうしてここにいて、何をしようとしているのか」が、リレー方式で議論されています。2冊目の1号は、一般販売も視野に入れ、あらためてCSCDを教育、研究、社会学連携の3点から紹介するとともに、デザインに関わる教員たちがCSCDでのデザインの課題について語りました。

そして、3冊目となる本書では、今日様々な場で使われるようになった「協働」という言葉をとりあげました。協働の姿は総合や分析、分類や俯瞰によっては見えてきません。あえて個々のスタッフに焦点をおくことによって、それぞれの違いをもとに全体が動いている様子を描くことを試みました。

後半の論集では、コミュニケーションデザインにかかわる論文・実践報告・研究ノートの新7編が報告されます。掲載された7編は、各著者から投稿された以降も、ピアレビュー（査読）という仕組みを通して洗練が繰り返され、掲載に至っています。

これらはいずれも、2008年度の活動を土台に編集されています。本書におけるコミュニケーションデザインに関する実践と思索が、この概念に新たな意味を与え、より創造的な実践へとつながることを期待しています。

オレンジブック・プロジェクト





目次

第1部 特集

| | |
|-------------|----|
| 特集 協働主義！ | 10 |
|-------------|----|

| | |
|----------------------|----|
| Part 1 これが私の協働主義！ | 12 |
|----------------------|----|

| | |
|-----------------------|----|
| 「ただ傍らにいる」ことから 渥美公秀 | 14 |
|-----------------------|----|

| | |
|-----------------|----|
| 夢を語ることから 関嘉寛 | 21 |
|-----------------|----|

| | |
|----------------------------|----|
| ネットワークを超えて智慧を分かち合う 菅磨志保 | 22 |
|----------------------------|----|

| | |
|---------------|----|
| 渥美公秀 協働的实践とは、 | 26 |
|---------------|----|

| | |
|-----------------------------------|----|
| まちを育てる、コミュニティーエージェンシーを育てる 森栗茂一 | 28 |
|-----------------------------------|----|

| | |
|-----------------------------|----|
| Part 2 協働主義！ 協働による協働のための | 38 |
|-----------------------------|----|

| | |
|--|----|
| ママのためのサイエンスカフェ —— 素人の視点から科学技術を論じあう 八木絵香 | 40 |
|--|----|

| | |
|---------------------------------------|----|
| 市民と研究者の知識交換 —— 阪大サイエンスショップの挑戦 平川秀幸 | 48 |
|---------------------------------------|----|

| | |
|---|----|
| 10%科学者や20%実践家がいてもよい —— 協働的科学者－実践家モデル 平井啓 | 56 |
|---|----|

第2部 コミュニケーションデザイン論集

| | |
|--|-----|
| 論文・実践報告 | |
| 生活の自律 ALS-Dプロジェクトの実践より | 67 |
| 高橋綾 志賀玲子 西村ユミ | |
| サイエンスショップの教育的意義 ショートタームリサーチの進捗状況 | 89 |
| 山内保典 中川智絵 小菅雅行 平川秀幸 | |
| 「原子力に関するオープンフォーラム」の試み | 113 |
| 八木絵香 | |
| 研究ノート | |
| 記録するとは別の仕方 で 映像コミュニケーションについて | 133 |
| 本間直樹 久保田テツ | |
| もうひとつの科学技術コミュニケーション | 151 |
| 仲谷美江 森有紀子 | |
| 「締まらないアートの可能性」 | 171 |
| 西川勝 宮本博史 | |
| 「現場力」研究術語集（第3報） | 189 |
| 西村ユミ 志賀玲子 池田光穂 山崎吾郎 仲谷美江 本間直樹 高橋綾 菅磨志保 西川勝 松本篤 | |
| 論文著者紹介 | |
| 202 | |
| 投稿規定 | |
| 204 | |
| 編集後記 | |
| 206 | |